

作文部門

文部大臣奨励賞

「わすれかけられたできごと」
千葉県・昭和学院小学校 三年 荒木 雄祐

人間のしたじっぱい。
せんそうがおこらな
いように、ぼくには
何ができるだろう。



八月十五日は、終せん記ねん日です。ぼくが生まれる
ずっと前、ぼくのおじいちゃんやおばあちゃんがわか
かったころ、日本は、せんそうをしていました。

「せんそう」この言葉は、ぼくが小さい時から今まで、
どちらかというと、かっこいい言葉のように思っていまし
た。それは、ぼくが知っているたたかいは、ゲームや遊び
の中でしかなかったからです。また、たたかいかつこと
は、強いことを意味すると、思っていました。でも、今、
ぼくは、「せんそう」という言葉を、とてもおそろしい言葉
だと思ふようになりました。

一学期に、「はたるのはか」のビデオを学校で見ました。
国語の時間には、「お母さんの紙びな」を勉強しました。両
方とも、せんそうにかんけいのある話です。ぼくは、せん
そうについて、もつとくわしく知れたかったので、おじい
ちゃんやおばあちゃんに、せんそう中の話を聞きました。
おばあちゃんは、そのころ、東京に住んでいたで、こ
わい思いをたくさんしたそうです。おばあちゃんの家の近
くに、ばくだんが落ちて、友だちが、死んでしまったりし
たそうです。また、おばあちゃんの家は、大きな工場をもつ
ていたのに、せんそうで工場をつづけられなくなったそう
です。食りようぶそくの時は、おばあちゃんは、おばあちゃ
んのお母さんのいなかへ、食べ物をもらいに行つたそうで
す。東京大空しゅうの時には、おばあちゃんのおじいさん
や、おばあちゃんのおばさんの生まれたばかりの赤ちゃん

が、死んでしまいました。

せんそうは、へいわにくらしてきた人々の生活をこわして
しまいます。

「せんそうは、人の心もかえてしまうのよ。」
と、おばあちゃんは、言いました。それは、東京の大空しゅ
うの時、おばあちゃんのおばあさんが、空しゅうで生きのこつ
たおばあちゃんのおばあさんが、おばあちゃんのおじいさんが
死んでしまったことで、ながが悪くなつてしまったそうです。
おばあさんは、空しゅうの時、おじいさんといっしょに、赤ちゃ
んをおんぶして、東京わんに、にげて行つたそうです。おじ
いさんは、自分のむすめであるおばあさんや赤ちゃんが、頭か
ら火のこをこぶっているのを見て、何とか助けようと、一生
けんめいおばあさんたちの火のこをはらいながらにげました。
「あつ。助けて。」

だれもが、水をさがして、にげまわつたそうです。海からあ
がつて、何も分からなくなつて、やつとの思いで、おばあ
ちゃんの家、にげてきたおばあさんは、おじいさんと、はぐ
れてしまったことに気がついたそうです。みんなで、海の方
にさがしに行くと、ちょうど海からあがつた場所に、おじい
さんが死んでいたそうです。

「なんてひどいことをするの？ おじいさんを見てるなんて。」
と、おばあさんは、親せきの人たちに言われ、悪者になつてし
まつたそうです。それを見て、おばあちゃんは、とても悲し
かつたそうです。目の前に地ごくを見た時、人は、みんな、

子どもの文化・教育研究所 理事長賞

「カラスはなぜなくの」

東京都・目黒星美学園小学校 三年 加藤 明子

私には、歌うと必ず悲しくなつて、同時にうれいような
気もして、泣きたくないのに涙が出て来る曲があります。
「カラスはなぜなくの」、この曲を聞くと、もう亡くなつた、
ひいおばあちゃんのことを思い出します。

ひいおばあちゃんが入院したのは、私が幼稚園の年中
のころでした。お見まいに行くといひいおばあちゃんは、白
い鉄のパイプのベッドでただボーッとすわっていました。
おばあちゃんやお母さんが何を話しても、答えません。
そつちを向こうともしません。もちろん私になんか、せんぜ
んはんのうしないのです。

私は何も見えないひいおばあちゃんの前で、ようち園で
習つた歌やおうぎを歌つておどれるようになっていまし
た。明子のオンステージです。もう知つてる歌を歌いつく
したころ、私は、「カラスはなぜなくの」を歌いました。
するとどうでしょう。ひいおばあちゃんがこつちを向いて、
かすれた声で、いっしょに歌い出したではありませんか。
でもけつきよくひいおばあちゃんは、たい院できずに亡く
なつてしまいました。

私は「あの時、ひいおばあちゃんは、お歌を歌つて楽し
かつたのではないかな。」と、思いました。そうしたら、年
をとることもボケることも、そんなに悲しいことではないよ
うな気がしました。

私はもう、「カラスはなぜなくの」を歌つても、涙は出な
いと思います。(抜粋)

歌やおうぎにぜんぜん反応しなかつたひいおばあちゃ
んが、カラスはなぜなくの」を聞いたとき、いっしょに歌い
出したというその生きようと力におどろく明子さんの気
持ちやひいおばあちゃんへの思いが伝わってくる作品です。

社団法人日本児童文芸家協会 会長賞

「長福丸よありがとう」

鹿児島県・加世田市立万世中学校 三年 中村きみこ

「おれが死ぬときは自分の船の上だ。海で死にたい。決し
て陸では死にたくない。」

かねがね父はそう言っていた。そして、その言葉のお
り、父の一生はこの船の上で暮をとじた。

私の父は三十九年間底引きえび漁業を営み、五十四歳で
亡くなつたが、その父には、働き、家族六人を育ててきて
くれた船があった。「長福丸」というが、字のごとく、長
く長くいつまでも福が続くようにという願いを込めての名
であつた。多くの人々にお金を借りてやつと自分の船を持
つた父は、今から十九年前、この長福丸で海へ出た。私には
三人の姉がいるが、一番上の姉が生まれた三月だつたそう
だ。

長福丸のような温かみのある船はほかにない。港の一番
遠くからでも、私は一目で長福丸の姿が確認できる。家族の
生活も父の人生も、この船と共にあつたのだ。

私が生まれてからの十四年間、長福丸はたくさん思い
出を作つてくれた。いやそれだけではない。私をここまで
育ててくれたのも長福丸だつたのだ。ねっからの海の男だつ
た父の分身ともいえる長福丸に、今私は心から感謝してい
る。たとえ他人の手に渡つても、この気持ちは決して変わ
ることはない。海を愛し船を愛し続けた父と長福丸は、私
達家族の心の中にいつまでも生き続けることだろう。(抜粋)

父の働く姿と共にあつた長福丸に感謝することで、亡き
父を思い、悲しみをこえて、生きる力へ変えていこうとし
ています。きみこさんの素直な気持ちがよく表れている生
き生きとした文章です。

日本子どもの本学会 会長賞

「ちきゅうのためのゴミなしけいかく」

東京都・筑波大学附属小学校 一年 太田 英侖奈

わたしたちが、ちきゅうのためにできることは、いくつ
ぐらいあるだろうか。

日本のはまへには、ゴミがたくさんある。そのなかには
外国からのゴミもあるし、日本のゴミもある。日本の人が
だしたゴミは日本の人がかたづけて、外国からのゴミは外
国人がかたづけるのがよいとわたしはおもっている。
わたしは、でんしゃとちかてつをのりついで、学校にか
よっている。そのとき、たくさんゴミがホームや、とお
りみちにおちている。そこで、わたしはうみのことをおも
いだしながらかんがえた。

ちかてつのホームやとおりみちを、ぜんぶつながつてい
るうみとおもえばいい。

うみはせかいじゅうでつながっている。それがちきゅう
だ。もし、ちきゅうがわたしたちのように、目や口やはな
があり、心があるとしたら、ちきゅうさんにもきもちのよ
いまいにちをおくらせてあげたい。

そこで、わたしはうみでもとおりみちでも、バスでい
でもえきのホームでもゴミひろいをしようと思つた。
学校のおともだちにゴミひろいをてつだつてもらえるよう
にはなしたら、

「いいよ、まかしといて。」

「いいわ。てつだつてあげる。」

といつてくれたので、とびあがるほどうれしかった。(抜粋)

テレビで見たことや新聞で読んだことをきつかけに、ゴ
ミひろいをしようと思つた英侖奈さん。「ちかてつのホー
ムやとおりみちを、ぜんぶつながつていううみ」と思つた
だけですまないで、行動する小学一年生です。

と、おばあちゃんは、言いました。
今も、世界中のどこかで、せんそうが行われています。ぼ
くは、人間同士のきずつけ合ひは、してはいけないことだ
と思ひます。そして、せんそうの原いんが、人間だということ
が、とても悲しいです。だから、わすれかけられているせん
そうのことを、ぼくは、語りついでいきたいと思ひます。そ
れが、ぼくに、たつたひとつでできることだからです。

授業での学習をきっかけに祖父母に話を聞いたことか
ら、戦争のおそろしさや悲しさをとらえています。人間が
してしまつた戦争に対して、今、自分ができることは何か
というところまで考えを深めているすばらしい作品です。

「手話と家族」

愛知県・岡崎市立常磐中学校 三年 都築 麻由

私にはまるで無関係だと思っていた手話を身近に感じるようになったのは、私が中三に進級した頃でした。父が手話に関する本を何冊も持って帰宅しました。

「手話の勉強をしているの？」

「うん、今度お父さんの部署で手話の講習会を企画したので予備知識として勉強しているんだよ。」

そして父は私に向かって「私の名前はツヅキタカヒデです」と手話を使って話したのです。

「わあ、かっこいい。」

と、私はその時単純に思い、口にしました。

私は父のトライがなかったら手話とめぐり合うチャンスはなかったでしょう。手話を知ってから今まで気づかなかった光景が目につくようになりました。レストランのガラス越しに見た若い二人や、街で見かけた親子連れが手話を使って話していたところです。その姿にはほのほとした気持ちを感じました。私は今度、困っている聴覚障害の人を見かけたら、勇気を出して「何かお困りですか」と話しかけてみようと思います。

将来、自分や家族が聴覚障害者にならないという保障はありません。もしそうなった時、周りに手話のできる人がいてくれたら安心です。私は手話に足を踏み入れたばかりの段階で、覚えることは山積みです。いつか役立てるその日まで、コツコツと練習していこうと思います。(抜粋)

ほのほとした家族の風景が目にかぶようなあたらしい作品です。手話の社会的な役割や障害をもつ人々への視点へと発展させるとより考えが深まったと思います。

「差別」

カナダ・カルガリー補習授業校 中学三年 庄子 はる香

私はカナダで生まれた日本人として、決して差別という言葉とは無関係ではなかった。

別の国の言葉を話したり、体が自由に動かなかつたりするからってその人と普通の人のあつかい方に差をつけるのは、どう考えても間違っている。

公民の教科書にもあるように、普段は何気なく使用しているものも、人によつては大変不便であるし、差別があることに気がつかないことも、差別の存在から目をそらしていることと変わらない。

差別を知らない人には分からないかもしれない。そういう人達に差別とはどんなことか、差別されるということはどんなに苦しくて悲しいことか、差別とはあつてはならないものだというところに気づいてほしい。そしてみんなもまだ気がついていないたくさんの方の差別を探し出して、真正面から見つめてほしい。私は人間一人一人を大切にしたい。大人でも子供でも、頭が良くても悪くても、左利きでも車いすで生活をしていても。人間は人間でみんな差別を受ける理由なんか決していない。

私は、人に振りまわされる生き方はもう嫌だ。誰がなんと言おうと、私は自分の生き方を自分自身で決めて実行したい。

いつか、差別なんかない世の中になるように。(抜粋)

海外で生きてゆくなかでの「差別」という体験を書くことは、かなり勇気のいることだったと思います。ぶつかった困難を受けとめて、乗り越えていこうとしているはる香さんの強さ、たくましさ伝わってくる作品です。

入賞

「約束」 東京都・星美学園小学校 五年 田村 彌佳

*祖父と小型犬のミニとのふれあいを書いたあたたかい作品です。

「へ本を読めない」理由を発見

宮城県・仙台市立五橋中学校 一年 木村 牧人

*父親の本「即興詩人」から発見した「読書」をめぐる考察が新鮮です。

「今在る私、これからの私」

千葉県・千葉大学教育学部附属中学校 二年 角野 愛

*「今を精一杯生きる」という前向きな姿勢がよく表現されています。

「祖父と共に生きる」

愛知県・安城市立安城南中学校 三年 木村 里子

*祖父への思いが伝わってきます。推敲をするところよくわかります。

総評

今回は低学年と中学生に力作が多く見られました。旅行や家族の病氣など特別なできごとばかりを書くのではなく、毎日の生活の中から、題材を取り上げて書いた中にきらりと光る作品がありました。

作文には、体験したことや、感動したこと、ほかに、記録や説明、意見や感想など、さまざまな書き方があります。自分が何について書きたいのか、何を言いたいのかをよく考えてから書くといでしょう。読む人の心をうつ作品を期待します。

●ワンポイントアドバイス●

文章全体の組み立てがしっかりしている作品や、内容のまとまりがよい作品がありました。ひととお読み直してないままの作品もありました。ひととお読み直したあとで読み返して、字のまちがいや段落はじめの一字下げなどを確かめてください。どこをくわしく書けばよいかなど、全体のバランスを考えて書き直すと、もっとすばらしい作品になると思います。